

攻撃の置き換え傾向尺度 (DAQ) 日本語版作成に関する研究¹

淡野 将太*

攻撃の置き換え傾向の個人差が、攻撃の置き換えによって生じやすい家庭内暴力などの攻撃行動を予測することが示されている。本研究では、日本における DAQ (Displaced Aggression Questionnaire: Denson, Pedersen, & Miller, 2006) の利用価値を指摘し、大学生および専門学校生 ($n=777$, 年齢範囲=18-24) を対象にした調査によって DAQ 日本語版を作成した。日本語版の因子構造は、原版と同様に、“怒りの反すう” 10 項目 ($\alpha=.92$), “報復の企図” 11 項目 ($\alpha=.92$), “攻撃の置き換え” 10 項目 ($\alpha=.93$) の 3 因子構造 31 項目 ($\alpha=.93$) であった。DAQ 日本語版総合尺度および日本版 BAQ 総合尺度を説明変数、家庭内言語的暴力尺度を基準変数とする重回帰分析の結果、DAQ 日本語版総合尺度は有意な影響力を示した一方 ($\beta=.29, p<.001$), 日本版 BAQ 総合尺度は有意な影響力を示さなかった ($\beta=.10, ns$)。攻撃特性から学生の家庭内言語的暴力を予測する場合には、DAQ 日本語版が有用であることが示された。

キーワード：攻撃、置き換えられた攻撃、反すう、攻撃特性、家庭内暴力

問題と目的

個人が挑発事象を経験した時に、挑発の源泉ではない他の対象に表出する攻撃は、置き換えられた攻撃 (displaced aggression) と定義される (Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939; Hovland & Sears, 1940)。例えば、上司から説教を受けた社員が家に帰って妻にきつくあたる、といった攻撃行動が置き換えられた攻撃である。また、誘発されて表出する置き換えられた攻撃のことを TDA (triggered displaced aggression) という (Dollard, 1938)。上記の例において、帰りが遅いと指摘されたことをきっかけに妻にきつくあたった場合、これを TDA と呼ぶ。

TDA の表出メカニズムは、Pedersen, Gonzales, & Miller (2000) によって明らかにされている。Pedersen et al. (2000) は、T1 (time 1) における挑発事象によって不快感情を喚起し、T2 (time 2) における些細 (trivial) な誘発事象によって置き換えられた攻撃を誘発する実験操作を行い、置き換えられた攻撃に及ぼす些細な誘発事象の影響を検討した。実験は、誘発事象の強度が

些細であることが特徴である。これは、挑発事象を経験した個人は、誘発事象の強度が些細であっても敵意的に解釈して置き換えられた攻撃を表出するのに対し、挑発事象を経験しなかった個人は、誘発事象の強度が些細であることから敵意的に解釈しないために置き換えられた攻撃を表出しない、という仮説に基づいているためである。実験は、問題解決能力に関する実験であると偽って行われた。T1 の挑発事象では、実験者は実験参加者にアナグラム課題を課し、その課題成績が悪いためにデータとして利用することができないと非難することにより挑発を行った。T2 の誘発事象では、研究アシスタントが実験参加者に、次の課題を行うと告げ、課題の説明を行う際に早口で説明し、説明の途中で発音および課題番号を間違えることにより誘発を行った。攻撃指標は、研究アシスタントに対する評価によって測定した。2 (挑発事象：あり、なし) × 2 (誘発事象：あり、なし) の 2 要因実験参加者間計画による実験の結果、挑発事象あり・誘発事象あり群のみ研究アシスタントに対する悪い評価 (i.e., 攻撃評定) を示し (標準化平均得点: $M=.52$), 挑発事象あり・誘発事象あり群の攻撃評定は、挑発事象あり・誘発事象なし群 ($M=-.29$), 挑発事象なし・誘発事象あり群 ($M=-.05$) および挑発事象なし・誘発事象なし群 ($M=.00$) の攻撃評定と比較して有意に高かった。さらに、媒介分析 (mediational analyses) の結果、挑発事象あり群の誘発事象によって喚起された不快感情は、攻撃評定に及ぼす誘発事象の影響を媒介していた。これらの結果から、個人が事前に何らかの挑発事象を経験していると、誘発事象が些

* 広島大学大学院教育学研究科, 日本学術振興会特別研究員
〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1
広島大学大学院教育学研究科教育 A 棟 7 階
発達心理学研究室
supernova2047@hiroshima-u.ac.jp

¹ 本研究は広島大学同窓会ドリームチャレンジ賞の助成を受けた。

本研究を一部として広島大学大学院教育学研究科2007年度修士論文を構成した。

細なものであっても敵意的に解釈し、TDA を表出することが明らかになった。

Pedersen et al. (2000) の知見を基に、Miller, Pedersen, Earleywine, & Pollock (2003) は、TDA 理論 (theoretical model of triggered displaced aggression) を提唱した。TDA 理論は、Berkowitz (1989, 1990, 1993) の認知的新連合理論 (cognitive neoassociationistic theory) の理論的枠組みに基づいた理論であり、また、Anderson & Bushman (2002) の一般攻撃モデル (general aggression model) と一致する理論である (攻撃行動の説明理論に関するレビューとして、湯川, 2005)。TDA 理論では、挑発事象と誘発事象の間の認知活動として、挑発事象で喚起された怒りについての反すうが仮定されている。個人が挑発事象を経験すると、連合ネットワーク内の攻撃に関連する感情、認知および覚醒が活性化される。これらの活性化は、時間とともに消失するが、挑発事象で喚起された怒りについて反すうを行うと、攻撃に関連する感情、認知および覚醒の活性化が維持され、後の攻撃行動の表出可能性を増加させる。個人がこの状態において誘発事象を経験すると、TDA を表出する。

TDA 理論に基づき、Denson, Pedersen, & Miller (2006) は、置き換えられた攻撃に従事しやすい傾向の個人差を測定する攻撃の置き換え傾向尺度 (Displaced Aggression Questionnaire: DAQ) を作成した。DAQ の下位尺度は、連合ネットワーク内の攻撃に関する感情、認知および覚醒に対応付けるかたちで、感情的要素として“怒りの反すう (angry rumination)”, 認知的要素として“報復の企図 (revenge planning)”, 行動的要素として“攻撃の置き換え (displaced aggression)” の3つの下位尺度で構成されている。“怒りの反すう”は、挑発事象によって生じた怒りについて反すうを行う傾向を測定する。“報復の企図”は、挑発事象について悪意を抱き、報復を企てる傾向を測定する。“攻撃の置き換え”は、挑発の源泉ではない他の対象に攻撃を加える傾向を測定する。また、DAQ の全項目の合計得点は、総合的な攻撃の置き換え傾向の個人差を測定するものとされている。

Denson et al. (2006) による DAQ の妥当性検討では、重回帰分析を用いて家庭内暴力尺度 (The Abuse Within Intimate Relationships Scale: Borjesson, Aarons, & Dunn, 2003) に及ぼす DAQ および直接的攻撃 (direct aggression) 傾向を測定する尺度である BAQ (Buss and Perry Aggression Questionnaire: BAQ: Buss & Perry, 1992) の影響が検討されている。これは、従来の攻撃研究が扱ってきた挑発の源泉に対する直接的攻撃に従事しや

すい特性である直接的攻撃傾向と、挑発の源泉ではない他の対象に対する置き換えられた攻撃に従事しやすい特性である攻撃の置き換え傾向の差異性を示すためである。分析の仮説は、ドメスティックバイオレンス (DV) を含む家庭内暴力に対して、DAQ の全項目の合計得点 (DAQ 総合尺度) は有意な影響力を示し、BAQ の全項目の合計得点 (BAQ 総合尺度) は有意な影響力を示さない、というものであった。これは、攻撃の置き換え傾向が高い個人は、事前に何らかの挑発事象を経験していると、挑発事象によって生じた怒りを反すうし、報復を企図し、攻撃を置き換える傾向が高いため、些細な誘発事象を敵意的に解釈し、家族などの挑発の源泉ではない対象に攻撃を表出すると考えられるためである。DAQ 総合尺度および BAQ 総合尺度を説明変数、家庭内暴力尺度を基準変数とする重回帰分析の結果、家庭内暴力尺度に対して、DAQ 総合尺度は有意な影響力 ($\beta = .35, p < .001$) を示したのに対し、BAQ 総合尺度は有意な影響力を示さなかった ($\beta = .09, ns$)。この結果は、直接的攻撃傾向と比較して、攻撃の置き換え傾向が家庭内暴力をより強く予測することを示している。

攻撃の置き換え傾向が高い個人は、事前に何らかの挑発事象を経験していると、些細な誘発事象によって誘発され、挑発の源泉ではない他の対象に攻撃を表出する傾向にある。攻撃の置き換え傾向の個人差は、攻撃の置き換えによって生じやすい家庭内暴力などの攻撃行動を予測可能である。わが国では、妻に対する夫からの DV、子どもに対する親からの児童虐待や親に対する子どもからの家庭内暴力が社会問題となっている。DV に関しては暴力相談等の認知件数 (18,208 件) が、児童虐待に関しては児童虐待事件の検挙件数 (297 件) がそれぞれ過去最高を記録し、家庭内暴力に関しては暴力内容の悪質化が指摘されている (警察庁, 2007a, b)。攻撃の置き換え傾向の個人差を把握することで、これらの攻撃行動の予防可能性が展望される。そこで本研究では、Denson et al. (2006) によって作成された DAQ の日本語版を作成する。

方 法

対象者および調査時期

広島県内の大学および専門学校5校において調査を行った。DAQ 日本語版 31 項目に欠損値がなく、DAQ 日本語版以外の尺度の欠損値が1項目であった回答のみ、該当項目の平均値を代入して分析を行うこととした。分析対象者は 777 名 (女性 443 名, 男性 313 名, 不明 21

名), 平均年齢は 19.82 歳 ($SD=1.12$), 年齢範囲は 18 歳から 24 歳であった。調査時期は 2006 年 11 月から 2006 年 12 月であった。

DAQ 日本語版の作成

DAQ 日本語版の作成は, 以下のような手続きを通して原版と日本語版の項目内容が等価になるよう配慮した。まず, 原著者 (Denson) から日本語版作成の許可を得た。次に, 中学校および高等学校外国語 (英語) の教員免許状を持つ著者と, アメリカにおいて心理学を専攻した大学院生 (在米期間 5 年) の合計 2 名が議論を行いながら, 日本語版の草案を作成した。続いて, 著者と心理学専攻の大学院生 2 名の合計 3 名が議論を行いながら, 2 言語間のニュアンスが一致するように日本語版を修正し, 心理尺度としての項目の日本語らしさや明瞭性を確認した。さらに, 日本語版について著者がバックトランスレーションを行い, 原版と項目内容が等しいか否かを原著者に判断を求めた。その結果, 原著者によって 3 項目の項目内容が原版と異なる判断された。この 3 項目について, 著者と原著者の間で議論を行い, 日本語版を修正した。修正した日本語版について, 英語を母語とし, 日本において心理学を専攻する大学院生 (在日期間 3 年) がバックトランスレーションを行い, 原版と項目内容が等しいか否かを原著者に判断を求めた。その結果, 原著者によって項目内容が等しいと判断された。

DAQ 日本語版の下位尺度のうち, “怒りの反すう” は, “私を怒らせた出来事について, 長い間考え続ける” などの 10 項目から成る。“報復の企図” は, “誰かが私を攻撃してきた時, 遅かれ早かれ仕返しをする” などの 11 項目から成る。“攻撃の置き換え” は, “自分の怒りを罪のない人にやっ当たりする” などの 10 項目から成る。DAQ 日本語版は合計 3 因子 31 項目で構成され, 総合的な攻撃の置き換え傾向の個人差を測定する。

妥当性の検討

英語圏および日本における今後の研究結果の比較を容易にするため, 原版の妥当性検討の手続きを追試する形式で日本語版の妥当性検討を行った。そのため, 妥当性検討に用いた尺度は, 原版で妥当性検討に用いられた尺度の日本語版, もしくは, 同一概念を測定する尺度を援用した。ただし, Patton, Stanford, & Barrat (1995) の衝動性尺度および Borjesson et al. (2003) の家庭内暴力尺度は, 標準化された日本語版尺度および同一概念を測定する尺度が存在しなかったため, 衝動性尺度については滝間・坂元 (1991) の認知的熟慮性—衝動性尺度を用い, 家庭内暴力尺度については Borjes-

son et al. (2003) を参考に日本語項目を作成して用いた。

質問紙の構成 DAQ 日本語版と妥当性の検討に用いた尺度の合計項目数は 248 項目であり, 全項目を一度の調査で実施することは調査対象者の負担になると考えられた。そのため, DAQ 日本語版と後述する①から⑩の尺度を組み合わせ, 4 通りの質問紙を作成して調査を行った。質問紙 1 は DAQ 日本語版・①・③・⑨・⑩を組み合わせた 81 項目 ($n=330$), 質問紙 2 は DAQ 日本語版・②・⑥・⑧を組み合わせた 70 項目 ($n=185$), 質問紙 3 は DAQ 日本語版・⑤・⑪を組み合わせた 101 項目 ($n=118$), 質問紙 4 は DAQ 日本語版・④・⑦・⑩を組み合わせた 89 項目 ($n=144$) であった。評定はすべて 7 段階評定法 (全くあてはまらない: 1-とてもよくあてはまる: 7) で行った。質問紙 1 には大学生と専門学校生が回答を行い, 質問紙 2, 3 および 4 には大学生が回答を行った。DAQ 日本語版の妥当性の検討に用いた各尺度および予想される相関関係を仮説として以下に示す。

①**日本版 BAQ** 日本版 BAQ (安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999) は直接的攻撃傾向を測定する尺度であり, 身体的な攻撃反応である身体的攻撃 6 項目, 怒りの喚起されやすさである短気 5 項目, 他者に対する否定的な信念・態度である敵意 6 項目, 言語的な攻撃反応である言語的攻撃 5 項目, 計 22 項目から成る。DAQ 日本語版および日本版 BAQ はともに攻撃概念を測定するが, 置き換えられた攻撃と直接的攻撃は表出する対象が異なる点において差異があるため, DAQ 日本語版と日本版 BAQ の各下位尺度の間には中程度の正の相関が予想される。

②**State-Trait Anger Expression Scale (STAXI) 日本語版** STAXI 日本語版 (鈴木・春木, 1994) は怒りを測定する尺度であり, 怒りを内にためる怒りの抑制 8 項目, 怒りを外部に向ける怒りの表出 9 項目, 怒りが外に出るのを抑えようとする怒りの制御 7 項目, 計 24 項目から成る。置き換えられた攻撃は, 挑発の源泉に対する怒りを抑制する一方で, 他の対象に怒りを表出しているため, DAQ 日本語版の各下位尺度と怒りの抑制および怒りの表出の間には正の相関, DAQ 日本語版の各下位尺度と怒りの制御の間には負の相関が予想される。

③**認知的熟慮性—衝動性尺度** 認知的熟慮性—衝動性尺度 (滝間・坂元, 1991) は, 認知スタイルを測定する尺度であり, 10 項目から成る。得点が高いほど認知的熟慮性が高くなる。原版では衝動性尺度を用いている

が、本研究では認知的熟慮性-衝動性尺度を援用した。原版では各下位尺度と衝動性の間に正の相関が確認されているため、DAQ日本語版の各下位尺度と認知的熟慮性の間には負の相関が予想される。

④**一般感情尺度** 一般感情尺度(小川・門地・菊谷・鈴木, 2000)は、感情を測定する尺度であり、肯定的感情8項目、否定的感情8項目、計16項目から成る。本研究では特性としての感情を測定するため、質問紙においては、“普段のあなたにどの程度あてはまるか評定してください”と表記した。置き換えられた攻撃は、否定的な感情を含有するため、DAQ日本語版の各下位尺度と肯定的感情の間には負の相関、DAQ日本語版の各下位尺度と否定的感情の間には正の相関が予想される。

⑤**Five Factor Inventory (FFI) 日本版** FFI日本版(下仲・中里・権藤・高山, 1999)は、パーソナリティのビッグ・ファイブを測定する尺度であり、神経症傾向12項目、外向性12項目、開放性12項目、調和性12項目、誠実性12項目、計60項目から成る。原版では各下位尺度と神経症傾向の間には正の相関、各下位尺度と調和性および誠実性の間には負の相関が確認されているため、これらの相関関係を仮説として設定する。

⑥**応答的行動尺度** 応答的行動尺度(濱口, 2003)は、仲間による挑発場面での応答的行動を測定する尺度である。加害者を許容する許容的行動5項目と加害者に報復を行う報復的攻撃行動3項目、計8項目から成る。原版が児童用に作成された尺度であるため、質問紙の構成にあたっては項目表現の一部を改め、大学生の応答的行動を測定するには不適切と考えられる2項目を削除して用いた。“報復の企図”と許容的行動の間には負の相関、“報復の企図”と報復的攻撃行動の間には正の相関が予想される。

⑦**日本語版 BIS/BAS 尺度** 日本語版 BIS/BAS 尺度²(上出・大坊, 2005)は、行動の接近傾向と回避傾向を測定する尺度であり、活性化されると行動を抑制したり、活動を変化させる“行動抑制システム (behavioral inhibition system: BIS)”7項目、活性化されると行動が促進される“行動活性化システム (behavioral approach system: BAS)”13項目、計20項目から成る。攻撃の置き換え傾向が高い個人は、認知面では報復を企図して

活性化が行われている一方、行動面では挑発の源泉に対する攻撃を抑制しており、行動の活性化よりも抑制の方が強いと言える。そのため、“攻撃の置き換え”はBASよりもBISと強く正相関すると予想される。

⑧**ネガティブな反すう尺度** ネガティブな反すう尺度(伊藤・上里, 2001)は、ネガティブな事象について繰り返し考える傾向を捉える7項目から成る。“怒りの反すう”とネガティブな反すうは、ともに反すうの概念を測定するため、“怒りの反すう”とネガティブな反すうの間には正の相関が予想される。

⑨**日本語版認知欲求尺度** 日本語版認知欲求尺度(神山・藤原, 1991)は、努力を要する認知活動に従事したり、それを楽しむ内発的な傾向である認知欲求を測定する15項目から成る。“怒りの反すう”および“報復の企図”は、思慮深い認知活動を嗜好する傾向とは異なるため、“怒りの反すう”および“報復の企図”は認知欲求と有意な相関を示さないと予想される。

⑩**社会的望ましき尺度** 社会的望ましき尺度(桜井, 1984)は、社会的望ましきを測定する22項目から成る。尺度の構成にあたっては、原版が児童用に作成された尺度であるため、質問紙の構成にあたっては項目表現の一部を改め、大学生の社会的望ましきを測定するには不適切と考えられる3項目を削除して用いた。置き換えられた攻撃は、社会的に望ましくない概念であるため、DAQ日本語版の各下位尺度と社会的望ましきの間には負の相関が予想される。

⑪**自尊感情尺度** 自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)は、自尊感情を測定する10項目から成る。攻撃行動と自尊感情および自己愛の関連について検討を行った研究(e.g., Bushman & Baumeister, 1998; 湯川, 2003)では、攻撃行動は自尊感情とは関連せず、自己愛と関連することが指摘されている。置き換えられた攻撃と自尊感情との関連については、Bushman & Baumeister(1998)が実験室研究によって検討を行い、行動としての置き換えられた攻撃は自尊感情と関連しないことが明らかにされている。しかし、原版では、“怒りの反すう”と自尊感情との間に負の相関が確認され、特性としての置き換えられた攻撃は、感情的側面において自尊感情と負の関連を有することが示されている。本研究においても、“怒りの反すう”と自尊感情が負の相関関係にあるか否かを検討すると同時に、“報復の企図”および“攻撃の置き換え”と自尊感情がどのような相関関係にあるのかについて、探索的に検討を行う。

⑫**家庭内言語的暴力尺度** 家庭内暴力を測定する尺度は、標準化された日本語版尺度が存在しないため、

² 本研究は、高橋・山形・木島・繁樹・大野・安藤(2007)によってBIS/BAS尺度日本語版が作成される以前に行った。そのため、DAQ日本語版の各下位尺度とBISおよびBASの関連については、上出・大坊(2005)によって作成された日本語版BIS/BAS尺度を用いて検討を行っている。

Borjesson et al. (2003) を参考に日本語項目を作成して用いた。家庭内暴力には、“親の子に対する暴力”、“夫婦間の暴力”、“子の親に対する暴力”、“同胞間の暴力”、“子の祖父母に対する暴力”および“義父母の子に対する暴力”があるとされる(茨木, 2002)。本研究の対象者は大学生および専門学校生であるため、大学生および専門学校生の家庭内暴力に広くあてはまると考えられる“子の親に対する暴力”に限定して測定した。質問項目は、Borjesson et al. (2003) を参考に、項目1 “家の中で、親を侮辱することを言うことがある(心理的暴力)”，項目2 “家の中で、親に対して嘘をつくことがある(欺き)”，項目3 “家の中で、親をののしることがある(言語的暴力)”，項目4 “家の中で、親を叩いたり物を投げつけることがある(顕在的暴力)”，項目5 “家の中で、親の腕や胸ぐらをつかむことがある(制限的暴力)”の5項目を作成し、家庭内暴力尺度とした。しかし、各項目の得点分布について検討を行ったところ、項目4および項目5は分布が偏っていたことから分析から除外した。残りの3項目については主成分分析を行い、1主成分3項目で採用し得る結果が得られたことから(順に、.89, .70, .91)、これら3項目を家庭内言語的暴力尺度とした。また、親がいないと回答した者($n=7$)の回答は分析から除外した。DAQ日本語版の各下位尺度と家庭内言語的暴力の間には正の相関が予想される。

家庭内言語的暴力に及ぼす DAQ および BAQ の影響 Denson et al. (2006) では、DVを含む家庭内暴力尺度に対して、DAQ総合尺度は有意な影響力を示し、BAQ総合尺度は有意な影響力を示さないという結果が得られ、攻撃の置き換え傾向が高い個人は、DVを含む家庭内暴力を行う傾向にあることが示されている。すなわち、攻撃特性から家庭内暴力を予測する場合には、DAQが有用であることが示されている。原版と同様に、攻撃の置き換え傾向が高い大学生および専門学校生は、家庭内における言語的暴力を行う傾向にあると考えられる。そこで、予測的妥当性の観点から、攻撃の置き換え傾向を測定するDAQ日本語版総合尺度および直接的攻撃傾向を測定する日本版BAQ総合尺度を説明変数、家庭内言語的暴力尺度を基準変数とする重回帰分析によって、家庭内言語的暴力に及ぼすDAQおよびBAQの影響を検討する。DAQ日本語版総合尺度は家庭内言語的暴力に対して有意な影響力を示すのに対し、日本版BAQ総合尺度は有意な影響力を示さないと予想される。

結果と考察

因子構造

DAQ日本語版31項目($n=777$)について、最尤法による因子分析を行った結果、固有値が10.8, 4.4, 3.0, 1.1, 0.9, 0.8, 0.8(以下略)と推移したため、3因子を抽出した。固有値は、スクリープロット基準およびカイザーガットマン基準を満たしていた。次に、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った結果、原版と同じ3因子31項目($\alpha=.93$)で採用し得る値が得られ、第1因子が“攻撃の置き換え”10項目($\alpha=.93$)、第2因子が“怒りの反すう”10項目($\alpha=.92$)、第3因子が“報復の企図”11項目($\alpha=.92$)となった。DAQ日本語版の項目および因子分析における因子負荷量をTable 1に示す。DAQ日本語版3因子における適合度は、GFI=.97, CFI=.98, RMSEA=.07であった。

再検査信頼性

同一対象者($n=113$)に4週間の間隔をおいてDAQ日本語版を2度実施し、2度の調査における得点の相関係数を算出した。その結果、“怒りの反すう”では $r=.76$ 、“報復の企図”では $r=.79$ 、“攻撃の置き換え”では $r=.79$ 、DAQ日本語版全体では $r=.78$ であった(いずれも $p<.01$)。これらの結果から、DAQ日本語版は測定の信頼性を有することが示された。

記述統計量および性差

DAQ日本語版の下位尺度と全体の記述統計量および性差をTable 2に示す。DAQ日本語版の下位尺度と全体の平均値について t 検定を行ったところ、“報復の企図”においては男性が女性よりも高く($t(754)=4.83, p<.01$)、“攻撃の置き換え”においては女性が男性よりも高かった($t(754)=5.94, p<.01$)。また、“怒りの反すう”($t(754)=0.73, ns$)およびDAQ日本語版全体($t(754)=0.64, ns$)においては、性差は見られなかった。“報復の企図”における性差は、原版と同様に男性が女性よりも高いという結果であるが、“攻撃の置き換え”における女性が男性よりも高いという結果は、本研究においてのみ確認されたものである。

妥当性

ここではまず、仮説に沿ってDAQ日本語版の下位尺度と妥当性の検討に用いた各尺度の相関関係(Table 3)を考察する。次に、予測的妥当性の観点から家庭内言語的暴力に及ぼすDAQおよびBAQの影響について検討を行った重回帰分析について考察する。最後に、仮説を支持しない結果、すなわち、原版と日本語版の

Table 1 DAQ日本語版の項目および因子分析における因子負荷量

| No. | 項目 | F1 | F2 | F3 |
|-----|--|------|------|------|
| 26. | 自分の怒りを罪のない人にやつ当たりする | .87 | -.01 | -.03 |
| 25. | 怒りやイライラの原因が家族や友人でなくても、家族や友人に対して逆上することがある | .84 | .04 | -.12 |
| 23. | 気分が悪い時、他の人にやつ当たりする | .82 | -.01 | -.03 |
| 29. | 仕事や学校で嫌な事があったら、家族や友人に対して攻撃的になることがある | .81 | .00 | -.01 |
| 28. | もし誰かが私を怒らせたなら、私はその怒りを他の人につけると思う | .79 | -.04 | .06 |
| 22. | 誰かもしくは何かが私を怒らせた時、他の人にやつ当たりすると思う | .79 | -.06 | .05 |
| 24. | 怒った時、親しい人にやつ当たりしたことがある | .79 | .07 | -.16 |
| 27. | 物事が計画通りに進まない時、最初に目に付いた人に自分のイライラをやつ当たりする | .65 | -.03 | .18 |
| 30. | 怒っている時、人の気持ちなど気にせずに厳しく非難する | .52 | -.03 | .25 |
| 31. | もし学校や仕事でつらい一日を過ごしたら、その事についてまわりの人に不満をぶつける | .50 | .08 | .00 |
| 1. | 私を怒らせた出来事について、長い間考え続ける | -.04 | .87 | -.13 |
| 3. | 私を怒らせた事について、何度も繰り返して考えている自分に気づくことがある | -.02 | .86 | -.10 |
| 5. | 怒りを経験した時はいつでも、その怒りについてしばらくの間考え続ける | -.01 | .84 | -.09 |
| 7. | 怒りを体験した後に、頭の中でもう一度その出来事を思い起こす | .04 | .78 | -.05 |
| 4. | 誰かが私を怒らせた時の事を、考えずにはいられないことがある | .01 | .75 | .01 |
| 2. | 過去に私を怒らせた事について考えるだけで、また怒りがこみあげてくる | -.01 | .70 | .07 |
| 9. | ずっと前の出来事を考えて、それがいまだに私を怒らせることがある | -.03 | .66 | .11 |
| 10. | 怒った時、長い間自分の思考や感情のことばかり考える傾向がある | .13 | .62 | .07 |
| 6. | 口論が終わった後に、想像の中でその相手との口論を続ける | -.04 | .57 | .09 |
| 8. | 自分の人生のある事柄について、怒りを感じる | .04 | .49 | .09 |
| 19. | 誰かが私を攻撃してきた時、遅かれ早かれ仕返しをする | -.03 | -.18 | .87 |
| 20. | もし誰かが意図的に私に危害を加えたら、できる復しゅうは何でもする | -.02 | -.18 | .85 |
| 12. | もし誰かが私に危害を加えてきたら、報復できるまで気が晴れない | -.01 | .03 | .81 |
| 11. | 誰かが私を怒らせた時、どうやってその人に仕返しをするかを考えずにはいられない | -.05 | .15 | .73 |
| 14. | もし私に危害を加えた人に借りを返す方法が思いつかないと、イライラする | .02 | .15 | .70 |
| 16. | もし誰かが私を傷つけたら、その人に仕返しをしても許されると思う | .01 | -.07 | .69 |
| 17. | 復しゅうしてから時間が経てば経つほど、その復しゅうについてますます満足する | -.01 | .01 | .65 |
| 13. | 人に仕返しをしている状況を想像することがある | -.01 | .22 | .61 |
| 18. | 争いや対立が終わった後、復しゅうをしている空想にふける | .02 | .21 | .55 |
| 21. | 私に嫌な事をした人を、決して助けない | .01 | -.01 | .55 |
| 15. | 私を怒らせた人に仕返しをする方法を、その出来事が起こったずっと後に考える | -.04 | .26 | .52 |

注：番号はDenson, Pedersen, & Miller (2006) の原版と対応している

因子間相関

I II

II .36

III .32 .53

Table 2 DAQ日本語版の下位尺度と全体の記述統計量および性差

| 下位尺度 | 全体 (n = 777) | 女性 (n = 443) | 男性 (n = 313) | 性差 (t 値) |
|---------|--------------|--------------|--------------|----------|
| 怒りの反すう | 3.77 (1.31) | 3.80 (1.27) | 3.73 (1.38) | 0.73 ns |
| 報復の企図 | 2.76 (1.20) | 2.58 (1.13) | 3.00 (1.24) | 4.83 ** |
| 攻撃の置き換え | 3.13 (1.26) | 3.35 (1.22) | 2.81 (1.25) | 5.94 ** |
| 全体 | 3.21 (0.98) | 3.22 (0.93) | 3.17 (1.04) | 0.64 ns |

注1：各得点は1項目あたりの平均値

**p < .01

注2：カッコ内はSD

差異性について考察する。

怒りの反すう 仮説を支持する結果として、“怒りの反すう”は、身体的攻撃、短気、敵意、怒りの抑制、怒りの表出、否定的感情、神経症傾向、ネガティブな反すうおよび家庭内言語的暴力との間に正の相関を示し、調和性、社会的望ましきおよび自尊感情との間に負の相関を示した。一方、仮説を支持しない結果とし

て、“怒りの反すう”は、認知的熟慮性および認知欲求との間に正の相関を示し、言語的攻撃、怒りの制御、肯定的感情および誠実性との間には有意な相関を示さなかった。

報復の企図 仮説を支持する結果として、“報復の企図”は、身体的攻撃、言語的攻撃、短気、敵意、怒りの抑制、怒りの表出、否定的感情、神経症傾向、報復

Table 3 DAQ日本語版の下位尺度と妥当性の検討に用いた各尺度の相関関係

| 変数 | n | α | 怒りの反すう | | 報復の企図 | | 攻撃の置き換え | |
|------------|-----|----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | | | $\alpha=.92$ | | $\alpha=.92$ | | $\alpha=.93$ | |
| ①身体的攻撃 | 330 | .74 | .27** | (.13, .40) | .56** | (.45, .65) | .30** | (.17, .42) |
| ①言語的攻撃 | 330 | .74 | .04 | (-.10, .18) | .12* | (-.02, .26) | .03 | (-.11, .17) |
| ①短気 | 330 | .81 | .40** | (.27, .51) | .32** | (.19, .44) | .59** | (.49, .68) |
| ①敵意 | 330 | .80 | .37** | (.24, .49) | .29** | (.15, .41) | .33** | (.20, .45) |
| ②怒りの抑制 | 185 | .91 | .30** | (.12, .46) | .26** | (.07, .43) | -.09 | (-.27, .10) |
| ②怒りの表出 | 185 | .87 | .19** | (.00, .37) | .23** | (.04, .40) | .56** | (.42, .68) |
| ②怒りの制御 | 185 | .90 | -.01 | (-.20, .18) | -.01 | (-.20, .18) | -.25** | (-.42, -.06) |
| ③認知的熟慮性 | 330 | .84 | .35** | (.22, .47) | .11* | (-.03, .25) | .12* | (-.02, .26) |
| ④肯定的感情 | 144 | .94 | -.09 | (-.30, .13) | .05 | (-.17, .26) | .00 | (-.21, .21) |
| ④否定的感情 | 144 | .90 | .30** | (.09, .48) | .20* | (-.01, .40) | .13 | (-.09, .33) |
| ⑤神経症傾向 | 118 | .84 | .57** | (.39, .71) | .36** | (.14, .55) | .53** | (.34, .68) |
| ⑤外向性 | 118 | .83 | -.04 | (-.27, .20) | .04 | (-.20, .27) | -.01 | (-.25, .23) |
| ⑤開放性 | 118 | .54 | .26** | (.03, .47) | .04 | (-.20, .27) | -.01 | (-.25, .23) |
| ⑤調和性 | 118 | .65 | -.29** | (-.49, -.06) | -.40** | (-.58, -.18) | -.15 | (-.37, .09) |
| ⑤誠実性 | 118 | .72 | .07 | (-.17, .30) | .01 | (-.23, .25) | -.15 | (-.37, .09) |
| ⑥許容的行動 | 185 | .69 | -.01 | (-.20, .18) | -.17* | (-.35, .02) | .03 | (-.16, .22) |
| ⑥報復的攻撃行動 | 185 | .85 | .05 | (-.14, .24) | .18* | (-.01, .36) | .05 | (-.14, .24) |
| ⑦BIS | 144 | .85 | .35** | (.15, .52) | .00 | (-.21, .21) | .26** | (.05, .45) |
| ⑦BAS | 144 | .88 | .13 | (-.09, .33) | .25** | (.04, .44) | .10 | (-.12, .31) |
| ⑧ネガティブな反すう | 185 | .90 | .61** | (.48, .72) | .34** | (.16, .50) | .30** | (.12, .46) |
| ⑨認知欲求 | 330 | .85 | .20** | (.06, .33) | .01 | (-.13, .15) | -.03 | (-.17, .11) |
| ⑩社会的望ましき | 144 | .74 | -.27** | (-.46, -.06) | -.36** | (-.53, -.16) | -.33** | (-.51, -.13) |
| ⑪自尊感情 | 118 | .85 | -.35** | (-.54, -.12) | -.14 | (-.36, -.10) | -.32** | (-.52, -.09) |
| ⑫家庭内言語的暴力 | 323 | .78 | .23** | (.09, .36) | .19** | (.05, .32) | .37** | (.24, .49) |

注：カッコ内は99%信頼区間

* $p < .05$, ** $p < .01$

的攻撃行動および家庭内言語的暴力との間に正の相関を示し、調和性、許容的行動および社会的望ましきとの間に負の相関を示し、認知欲求との間に有意な相関を示さなかった。一方、仮説を支持しない結果として、“報復の企図”は、認知的熟慮性との間に正の相関を示し、怒りの制御、肯定的感情および誠実性との間に有意な相関を示さなかった。また、探索的に検討した“報復の企図”と自尊感情との間には有意な相関が示されなかった。

攻撃の置き換え 仮説を支持する結果として、“攻撃の置き換え”は、身体的攻撃、短気、敵意、怒りの表出、神経症傾向および家庭内言語的暴力との間に正の相関を示し、怒りの制御および社会的望ましきとの間に負の相関を示した。“攻撃の置き換え”と日本語版 BIS / BAS 尺度の相関関係は、“攻撃の置き換え”と BIS は有意な正の相関を示し、“攻撃の置き換え”と BAS は有意な相関を示さなかった。また、“攻撃の置き換え”と BIS の相関係数と、“攻撃の置き換え”と BAS の相関係数について差の検定を行ったところ $z=1.79$ ($p=.07$) であった。一方、仮説を支持しない結果として、“攻撃の置き換え”は、認知的熟慮性との間に正の相関を示し、言語的攻撃、怒りの抑制、肯定的

感情、否定的感情、調和性および誠実性との間には有意な相関を示さなかった。また、探索的に検討した“攻撃の置き換え”と自尊感情との間には負の相関が示された。

家庭内言語的暴力に及ぼす DAQ および BAQ の影響 DAQ 日本語版総合尺度 (31項目, $\alpha=.93$) および日本版 BAQ 総合尺度 (22項目, $\alpha=.81$) を説明変数、家庭内言語的暴力尺度を基準変数とする重回帰分析を行い、家庭内言語的暴力に及ぼす DAQ および BAQ の影響を検討した ($n=323$)。その結果、予想通り、家庭内言語的暴力尺度に対して DAQ 日本語版総合尺度 ($\beta=.29$, $p<.001$) は有意な影響力を示したのに対し、日本版 BAQ 総合尺度 ($\beta=.10$, ns) は有意な影響力を示さなかった。

Denson et al. (2006) との差異 DAQ 日本語版の各下位尺度と妥当性の検討に用いた各尺度との相関関係には、認知欲求のように原版とは反対の相関関係にあるものや、誠実性のように有意な相関を示さないものが見られた。また、“攻撃の置き換え”における女性が男性よりも高いという性差は、日本語版においてのみ確認されたものである。これらの差異について考察すると、要因のひとつとして調査対象者の年齢の差異

が考えられる。原版の調査対象者は、18歳の青年期の学生から83歳の老年期の成人である。各下位尺度得点と年齢の間には負の相関が確認され、年齢が高くなるにつれて攻撃の置き換え傾向が低くなることが示されている(“怒りの反すう”: $r = -.11$, “報復の企図”: $r = -.13$, “攻撃の置き換え”: $r = -.23$, いずれも $p < .05$)。一方、日本語版の調査対象者は18歳から24歳の青年期の学生である。原版と日本語版における調査対象者の年齢の差異が各下位尺度の得点分布に影響し、相関関係および性差に差異が生じた可能性が考えられる³。

しかしながら、DAQ日本語版は概して、直接的攻撃傾向、怒り、否定的感情、神経症傾向、BISおよび家庭内言語的暴力との間で正の相関を示し、調和性および社会的望ましさととの間で負の相関を示した。下位尺度ごとに検討すると、“怒りの反すう”はネガティブな反すうと正の相関を示し、“報復の企図”は報復的攻撃行動と正の相関および許容的行動と負の相関を示し、“攻撃の置き換え”はBASと有意な相関を示さず、BISと正の相関を示した。妥当性の観点から検討したこれらの相関関係は、攻撃の置き換え傾向と関連する主要特性との関連性を示すものである。そのため、DAQ日本語版は、学生における攻撃の置き換え傾向の個人差を測定するものと解釈できる。また、予測的妥当性の観点から検討を行った重回帰分析では、DAQ日本語版総合尺度は家庭内言語的暴力に有意な影響力を示し、学生の家庭内における言語的暴力を予測することが示された。攻撃特性から学生の家庭内における言語的暴力を予測する場合には、DAQ日本語版は有用な尺度として用いられよう。

総合考察

本研究では、攻撃の置き換え傾向の個人差が、攻撃の置き換えによって生じやすい家庭内暴力などの攻撃行動を予測することを取り上げ、日本におけるDAQの利用価値を指摘した。そして、大学生および専門学校生を対象にした調査によってDAQ日本語版を作成し、信頼性および妥当性を検討した。因子構造、再検査信頼性および妥当性に関する各種検討から、DAQ日本語版は、原版と同じ3因子構造31項目であり、測定信頼性を有し、学生における攻撃の置き換え傾向の個人差を測定し、測定される攻撃の置き換え傾向の個人差は学生の家庭内言語的暴力を予測することが示された。ここでは、DAQ日本語版の利用可能性と今後

の課題について考察する。

Densen et al. (2006) では、DAQが学生および成人のDVを含む家庭内暴力を予測し、本研究においてもDAQ日本語版が学生の家庭内における言語的暴力を予測することが示された。そのため、攻撃の置き換え傾向が高い個人への介入が、置き換えられた攻撃によって引き起こされる社会問題の解決に貢献することが期待できる。Bushman, Bonacci, Pedersen, Vasquez, & Miller (2005) は、挑発事象と誘発事象の間の認知活動について操作を行い、TDAに及ぼす反すうの影響を検討している。その結果、挑発事象と誘発事象の間の認知活動として、反すうを行った群は、気晴らしを行った群およびポジティブなムードについての思考を行った群よりも有意に強いTDAを表出することが明らかとなった。この結果は、気晴らしやポジティブなムードについての思考が置き換えられた攻撃の表出を低減させることを示唆している。Bushman et al. (2005)の知見に基づくと、攻撃の置き換え傾向が高い個人には、気晴らしやポジティブなムードについての思考を行うといった、リラクゼーション法や認知行動療法的介入が有効であると考えられる。

健康の視座から進められた攻撃研究では、攻撃性と循環器疾患の関連、攻撃性と心理的健康の関連、攻撃性および敵意と生活習慣の関連など、攻撃性と身体および心理的健康の関連について広く検討を行ってきた(cf. 島井・山崎, 2002)。また、攻撃性と社会的適応性の関連も古くから検討されてきた(cf. Dodge, Coie, & Lynam, 2006)。今後は、攻撃の置き換え傾向と健康との関連や、攻撃の置き換え傾向と社会的適応性の関連など、DAQ日本語版を用いることによって攻撃の置き換え傾向に関する基礎的知見の蓄積が可能となる。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。すなわち、1つ目は、DAQ日本語版の対象年齢の拡大である。妥当性の検討においては、Denson et al. (2006)と本研究の結果に差異が見られた要因のひとつとして、両研究における調査対象者の年齢の差異を指摘した。DAQ日本語版を25歳以上のサンプルに応用することによって、学生および成人におけるDAQ日本語版の因子構造などの差異性および同一性が確認されるだろう。また、本研究では、学生の家庭内言語的暴力に及ぼすDAQ日本語版総合尺度の影響力を検討したが、対象年齢を拡大した調査から、DAQ日本語版が置き換えられた攻撃の形態となって表出されやすい攻撃行動をどの程度予測するかについても検討し、予測力の精緻化を行う必要がある。

³ 仮説を支持しない相関関係における散布図を検討したところ、外れ値(outlier)による影響は確認されなかった。

2つ目は、児童・生徒用 DAQ の作成である。問題行動の低減や社会的適応性を考える場合には、早期の発達段階での介入が重要となる。そのため、児童・生徒用 DAQ は、介入プログラムの構築の際に有用である。

最後は、直接的攻撃傾向および攻撃の置き換え傾向に関する文化間比較である。原版と日本語版の間に差異が生じた要因には、調査対象者の文化的自己観 (e.g., Markus & Kitayama, 1991) の差異も考えられる。Redford (1999) は、西洋の文化に特徴的な相互独立的自己観を有するとされるイギリスの大学生と、東洋の文化に特徴的な相互協調的自己観を有するとされる香港の大学生を対象に、比較文化研究の視座から攻撃に関する行動傾向についての調査を行っている。その結果、直接的攻撃に関する行動傾向については、イギリスの大学生が香港の大学生より有意に高く、置き換えられた攻撃に関する行動傾向については香港の大学生がイギリスの大学生より有意に高いことが明らかとなった。これらの結果から、文化的自己観によって攻撃に関する行動傾向が異なることが示唆される。原版は相互独立的自己観を有するとされるアメリカ人が調査対象者である一方、日本語版は相互協調的自己観を有するとされる日本人が調査対象者である。そのため、調査対象者の文化的自己観の差異が攻撃の置き換え傾向の差異に影響し、攻撃の置き換え傾向の差異が相関関係および性差の差異に影響した可能性が考えられる。社会的行動特徴としての攻撃の置き換え傾向を測定する DAQ を用いた文化間比較は、比較文化研究の領域においても示唆に富む知見となるであろう。

引用文献

- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human aggression. *Annual Review of Psychology*, *53*, 27-51.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, *70*, 384-392. (Ando, A., Soga, S., Yamasaki, K., Shimai, S., Shimada, H., Utsuki, N., Oashi, O., & Sakai, A. (1999). Development of Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ). *Japanese Journal of Psychology*, *70*, 384-392.)
- Berkowitz, L. (1989). Frustration-aggression hypothesis : Examination and reformation. *Psychological Bulletin*, *106*, 59-73.
- Berkowitz, L. (1990). On the formation and regulation of anger and aggression : A cognitive-neoassociationistic analysis. *American Psychologist*, *45*, 494-503.
- Berkowitz, L. (1993). *Aggression : Its causes, consequences, and control*. New York : McGraw-Hill.
- Borjesson, W. I., Aarons, G. A., & Dunn, M. E. (2003). Development and confirmatory factor analysis of the Abuse Within Intimate Relationships Scale. *Journal of Interpersonal Violence*, *18*, 295-309.
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression : Does self-love or self-hate lead to violence ? *Journal of Personality and Social Psychology*, *75*, 219-229.
- Bushman, B. J., Bonacci, A. M., Pedersen, W. C., Vasquez, E. A., & Miller, N. (2005). Chewing on it can chew you up : Effects of rumination on triggered displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, *88*, 969-983.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, *63*, 452-459.
- Denson, T. F., Pedersen, W. C., & Miller, N. (2006). The Displaced Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, *90*, 1032-1051.
- Dodge, K. A., Coie, J. D., & Lynam, D. (2006). Aggression and antisocial behavior in youth. In W. Damon & R. M. Lerner (Series Eds.), N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology : Vol. 3, Social, emotional, and personality development* (pp. 719-788). New York : Wiley.
- Dollard, J. (1938). Hostility and fear in social life. *Social Forces*, *17*, 15-26.
- Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven, CT : Yale University Press.
- 濱口佳和 (2003). 2つの挑発場面における児童の応答的行動測定尺度の作成—攻撃児の持つ2つの問題「許せない心」と「報復的攻撃」— 筑波大

- 学心理学研究, **26**, 159-174. (Hamaguchi, Y.)
- Hovland, C., & Sears, R. (1940). Minor studies of aggression : VI. Correlation of lynchings with economic indices. *Journal of Psychology*, **9**, 301-310.
- 茨木俊夫 (2002). 家庭内暴力 開隆堂出版 (Ibaraki, T.)
- 伊藤 拓・上里一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, **34**, 31-42. (Ito, T., & Agari, I.)
- (2001). Development of the negative rumination scale and its relationship with depression. *Japanese Journal of Counseling Science*, **34**, 31-42.)
- 上出寛子・大坊郁夫 (2005). 日本語版 BIS/BAS 尺度の作成 対人社会心理学研究, **5**, 49-58. (Kamide, H., & Daibo, I.)
- 神山貴弥・藤原武弘 (1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, **6**, 184-192. (Kouyama, T., & Fujihara, T. (1991). A basic study of the need for cognition scale. *Research in Social Psychology*, **6**, 184-192.)
- 警察庁 (2007a). 警察白書平成19年版 ぎょうせい (National Police Agency)
- 警察庁 (2007b). 少年非行等の概要 (平成18年1~12月) 警察庁 2007年2月15日 <<http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen34/20070215.pdf>> (2007年12月12日) (National Police Agency)
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Miller, N., Pedersen, W. C., Earleywine, M., & Pollock, V. E. (2003). A theoretical model of triggered displaced aggression. *Personality and Social Psychology Review*, **7**, 75-97.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246. (Ogawa, T., Monchi, R., Kikuya, M., & Suzuki, N. (2000). Development of the general affect scale. *Japanese Journal of Psychology*, **71**, 241-246.)
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. (1995). Factor structure of the Barratt Impulsiveness Scale. *Journal of Clinical Psychology*, **51**, 768-774.
- Pedersen, W. C., Gonzales, C., & Miller, N. (2000). The moderating effect of triggering provocation on displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 913-927.
- Redford, P. (1999). Self-construal and anger action tendencies in Hong Kong and the United Kingdom. In W. J. Lonner, D. L. Dinnel, D. K. Forgas, & S. A. Hayes (Eds.), *Merging past, present, and future in cross-cultural psychology* (pp. 367-386). Lisse, Netherlands : Swets & Zeitlinger Publishers.
- 桜井茂男 (1984). 児童用社会的望ましき測定尺度 (SDSC) の作成 教育心理学研究, **32**, 310-314. (Sakurai, S. (1984). The construction of social desirability scale for children (SDSC). *Japanese Journal of Educational Psychology*, **32**, 310-314.)
- 島井哲志・山崎勝之 (2002). 攻撃性の行動科学—健康編— ナカニシヤ出版 (Shimai, S., & Yamasaki, M.)
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 (1999). NEO-PI-R, NEO-FFI 日本版共通マニュアル 東京心理 (Shimonaka, Y., Nakazato, K., Gondo, Y., & Takayama, M.)
- 鈴木 平・春木 豊 (1994). 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, **7**, 1-13. (Suzuki, T., & Haruki, Y. (1994). The relationship between anger and circulatory disease. *Japanese Journal of Health Psychology*, **7**, 1-13.)
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁梶算男・大野 裕・安藤寿康 (2007). Grayの気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版作成と双生児法による行動遺伝学的検討— パーソナリティ研究, **15**, 276-289. (Takahashi, Y., Yamagata, S., Kijima, N., Shigemasa, K., Ono, Y., & Ando, J. (2007). Gray's temperament model : Development of Japanese version of BIS/BAS scales and a behavior genetic investigation using the twin method. *Japanese Journal of Personality*, **15**, 276-289.)
- 滝間一嘉・坂元 章 (1991). 認知的熟慮性—衝動性尺度の作成—信頼性と妥当性の検討 日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集,

39-40. (Takigi, K., & Sakamoto, A.)
 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)
 湯川進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性—現実への適応と虚構への没入をふまえて—犯罪心理学研究, **41**, 27-36. (Yukawa, S.)

湯川進太郎 (2005). バイオレンス 攻撃と怒りの臨床社会心理学 北大路書房 (Yukawa, S.)

謝 辞

論文作成にあたりご指導・ご助言いただきました広島大学大学院教育学研究科の前田健一教授に感謝いたします。The author thanks Thomas F. Denson for his helpful comments concerning this manuscript.

(2007.3.2 受稿, 12.27 受理)

Japanese Version of the Displaced Aggression Questionnaire

SYOTA TANNO (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, HIROSHIMA UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 171-181

Past research has indicated that individual differences in trait displaced aggression could predict aggressive behavior, such as domestic abuse. A Japanese version of the Displaced Aggression Questionnaire (DAQ; Denson, Pedersen, & Miller, 2006) was developed and tested on university and technical college students ($N=777$, age range: 18-24). Factor analyses identified 3 factors in the 31-item structure ($\alpha=.93$): angry rumination ($\alpha=.92$), revenge planning ($\alpha=.92$), and general tendency to engage in displaced aggression ($\alpha=.93$). This structure was the same as that of the original English version. Multiple regression analysis revealed that the Japanese version of the Displaced Aggression Questionnaire predicted domestic verbal abuse ($\beta=.29$, $p<.001$), whereas the Japanese version of the Buss and Perry Aggression Questionnaire (Buss & Perry, 1992) did not ($\beta=.10$, ns). These results indicate that the Japanese version of the Displaced Aggression Questionnaire may be useful for utilizing trait aggression to predict domestic verbal abuse of students.

Key Words : aggression, displaced aggression, rumination, aggressive personality, domestic abuse